（二〇一一年度）

9 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は22ページ、三問である。）

受験についての注意

一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、携帯電話・ＰＨＳの電源は切ること。
三、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
四、監督から試験開始の合図があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっているかどうか確かめること。
五、**解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**その他の部分には何も書いてはならない。
六、筆記具は、**ＨかＦかＨＢの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
七、マークをするとき、枠からはみ出したり、枠のなかに白い部分を残したり、文字や番号、枠などに○や×をつけたりしてはならない。
八、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
九、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。採点が不可能になる。
十、試験時間中に退場してはならない。
十一、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十二、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

なにゆえに川童が人を見るといつでも角力を取りたがるのか。今まであまりありふれた話だから注意する者もなかったが、考えてみると奇妙なことである。川童の妖怪であるゆえんのもの、平たく言うと川童の怖ろしいわけは、人を引き込んで尻の子を抜くからであろうが、それと角力とは何分にも両立しない挙動であった。人の命を取るだけの自信があり、又計画のある川童ならば、何もわざわざ力を角してみる必要はないわけである。だから子供などは既にそんな話を信ぜず、普通はかれが水浴びに誘いに来るという方を怖れていた。実際毎年の夏になると、おりおりそういう疑いのある悲惨事が起こった。他の子供の出ておらぬ時刻に、又はその群からずっと離れた場所で、たった一人だけで子供が水の中に死んでいる。又は今まで遊んでいたのが急に見えなくなる。そうしてたいていはきまった淵などであるために、現場を見た者は誰もなくても、それが川童の所為だということになるので、人間にこの説明しがたい不幸のある限り、メドチの信用はいつになっても恢復する見込はないだろうが、それにしては人と角力を取って、勝って嬉しがってただ帰って行ったという話が、[1]いよいよ以て解しがたい不思議になるのである。

この点に関しては、私はもうだいぶ前から奥州南部のメドチに注意しなければならぬと思っていた。その理由は、私等の郷里で水に溺れて死ぬ者は、他に説明のつかぬ限り、誰でも川童に引かれたという推測を受け、お互いはすべてその危険があるように怖れているのだが、東北ではどうやらそれが最初から、人について定まっていると考えられているようである。この児は水のものに取られる相があると言われて、注意をしていたけれどもやはり取られたという類の世間話は多い。[2]川童に尻ごを抜かれる資格というのもおかしなものだが、今でもよく聴くのは紫臀をした者が、特にメドチによく狙われるということで、後になってからなるほどあの子供は、ほんにそうであったという場合が当地でも多いという話である。尻の紫は私の聞いた所では、モンゴリヤ系民族の常の現象だそうで、現に日本人の中にはその例はざらにある。それが川童の眼に好ましく見えるようでは、格別われわれも[3]安心というわけには行かぬが、とにかくにかれに選択があり、その条件に合した者だけが取られると

いうのは、何か仔細がなくてはならぬことであった。そうして気を付けていると他の地方にも、以前は同じように考えられていたのではないかと思う節が、少しずつ現われて来るのである。

そこでメドチが角力を取りに来たという話が、又大いに参考になるのである。人を途上に待ち伏せして、角力の勝負を挑むという怪物は、必ずしも川童だけではなかった。土佐でシバテン又は芝天狗というものも、他にはこれという悪戯をした話もないが、ただやたらに角力ばかり取りたがる。そうしてうかうかとその相手をしていた者が、しまいには発狂したとか、命を失ったとかいう風説ばかりが多かった。ただしこの話はまだ大分川童と似ている。土佐には川童というものも別にいたのだけれども、芝天が多く川の堤や橋の袂に現われ、その形が七八歳の小児と似ていたなどというのも、どことなく川童の出店のようであった。ところが今一種、これとはよほど性質はちがって、しかも角力のすきな怪物が東北にはいた。津軽から秋田に連なる深山幽谷において、山人、おお人又時として鬼ともいったものが即ちそれであるが、こちらは一向に人を害せんとする様子はなく、ただわれわれを見かけて角力を取ろうというのみで、勝ったり負けたりしているうちにだんだんと懇意になり、しまいには家へ遊びに来るまでになったという話さえある。いったん交際を始めると中途で止めることができぬらしく、怒られるとこわいからいつまでも機嫌を取っていなければならぬことが、迷惑といえば迷惑だったかも知れぬが、命を奪おうとせぬのみか、時には相撲の相手をして貰いたいために、薪を伐りマダの皮を剝ぎ畑を起こす等、大きな力で山仕事を手伝ってくれたという話も伝わっている。つまり素直にかれのいうことをきいてさえおれば、本人の利得に帰することが多かった。その点がよほど九州の川童などと違っているのである。

あるいはその九州の川童とても、もとはこういう風に平穏な交際であったのかも知れない。単に川童や芝天が出て来て角力を取ろうと言っただけならば、考えて見ると怖いはずはなかったのである。女や老翁の最初から自信のないものならば、第一にこれに応じて力を角する気にはならなかったろうし、たまたまその道の心得のある者でも、負けてばかりいるようだったら、かれも相手にはしようとしなかったろう。それが少しばかりの力自慢で、勝った経験のあるような男が、つい挑まれて何のこいつがと、一番負かしてやる気になって引っ掛かるのである。あるいは実際こっちの方が強くて、相手を投げ倒したため

に後の祟(たたり)が怖ろしかったという話もある。何にもせよ人と川童との交渉は一般的でなく、必ず一定の資格ある者に限ったことは、角力も紫臀の場合と異なる所がなかった。[5]

われわれの妖怪学の初歩の原理は、どうやらこの間から発明せられそうに思われる。[6]その一箇条としては、ばけ物思想の進化過程、即ち人がかれらに対する態度には三段の展開のあったことが、この各地方の川童の挙動と称するものから窺い知られる。第一段にはいわゆる敬して遠ざけるもので、出逢えばきゃっといい、角力を取ろうとすれば遁げて来る。夜分はその辺を決して通らぬという類、こうしておれば無難ではあるが、その代りにはいつまでも不安は絶えず、ある一定の場所だけは永く妖怪の支配に委棄(いき)しなければならない。[7]それをできるだけ否認せんとし、何の今時そのような馬鹿げたことがあるものかと、進んでかれの力を試みようとして、しかも内心はまだ気味が悪いという態度、これが第二段である。狐・クサイの化けかかっているのを見破って、かえっていつの間にか自分が坊主にされた話、又は天狗を軽蔑して力自慢をしていた勇士が、これでもこわくないかと毛だらけの腕でつかまれ、腰を抜かしたという類の話は、いずれもこの心境の所産であって、これにはしばしば角力の勝負を伴うていた。つまり人にはさまざまの考え方があっても、社会としては半信半疑の時代であった。それが今一歩を進めて信じない分子がいよいよ多くなると、次に現われて来るのは神の威徳、仏の慈悲、ないしは智慮に富む者の計略によって、化け物が兜(かぶと)をぬぎ正体を現わして、二度と再びかような悪戯(いたずら)をせぬと誓い、又は退治せられて全く滅びてしまったという話が起こる。それは聴いていてもおもしろく興があるので、次第に誇張せられてしまいには、馬鹿(ばか)げて弱く愚鈍なる者が、妖怪だということに帰着し、それを最後としておいおいに説話の世界から消えて行くのである。現在の昔話に僅に残っている妖怪は、この三つの種類が錯綜して、順序が明らかでないために時々は誤った解釈があるのだが、将来もう少し親切な観察者が、細かな分類をしてくれたらこれだけは判って来ることと思う。[9]そうして川童の角力という言い伝えは、これに関してはかなり有力な参考であると信ずる。

（柳田國男『妖怪談義』）

〈注〉 尻の子…肛門にあると想像された玉。
メドチ…かっぱの別名。
マダ…しなのき(樹木)。
委棄…構わないでほうっておくこと。
クサイ…たぬき。

問一 傍線部1「いよいよ以て解しがたい不思議になる」のはなぜか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 川童は、信用されていないがそれを気にかけてもいないから。
b 川童は、人間の説明しがたい不幸に対してもおどけているから。
c 川童は、姿を見られたことがないのにその感情まで知られているから。
d 川童は、恐ろしい存在なのに友好的な行動もとるから。

問二 傍線部2「川童に尻ごを抜かれる資格」をもった者はどのような者だと考えられるか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 川童の難を免れる者。
b 川童に尻込みさせる者。
c 川童が気に入った者。
d 川童を出し抜く者。

問三　傍線部3「安心というわけには行かぬ」理由は何か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　紫臀であるかどうかは関係ないから。

b　紫臀とは限らないから。

c　紫臀の子供に会ったかもしれないから。

d　紫臀である可能性が高いから。

問四　傍線部4「川童の出店のようであった」と筆者が判断する理由は何か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　姿、行動が川童に類しているから。

b　川童の勢力拡大と考えられるから。

c　背後で操っているのは川童だから。

d　川童の宣伝行為にあたるから。

問五　傍線部5「人と川童との交渉は一般的でなく」とあるが、その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　川童はだれとでも角力をとろうとしたわけではない。

b　人と川童とのやりとりは広く認められていたわけではない。

c　川童は普通人と談判しようとしたわけではない。

d　人と川童との取り決めは普遍的であったわけではない。

問六　傍線部6「この間から発明せられそう」の説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　人と川童とのこの距離から新たに考え出せそう。

b　人と川童とのこの関係から明らかにできそう。

c　人と川童とのこの空間から考案されそう。

d　人と川童とのこの時間から創造できそう。

問七　傍線部7「それをできるだけ否認せんとし」とあるが、「否認せん」としたことの内容としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　妖怪を束縛しておくべき分野があること。

b　妖怪の難は免れるが安心できない部分があること。

c　妖怪が角力に誘い、夜に出てくる事実があること。

d　妖怪に統治をまかせる領域があること。

問八　傍線部8「兜をぬぎ」で使われている「兜をぬぐ」の用例として正しくないものを次の中から一つ選べ。

a　彼女の書道の腕前には兜をぬいだ。

b　論争に勝ったと思った彼は兜をぬいだ。

c　緻密な論法を駆使する彼に対しては兜をぬがざるをえない。

d　自信をもっていた彼女も兜をぬぐ時がきた。

問九　傍線部9「これだけは判って来ること」とあるが、何が「判って来る」のか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　半信半疑の時代の次にはまったく信じない時代が来るということ。

b　将来説話の中から妖怪が消えていくこと。

c　人の妖怪に対する態度には三つの発展過程があること。

d　昔話に残る妖怪の分類が錯綜としていること。

問十　本文中に出てくる「メドチ」の説明として正しいものを次の中から一つ選べ。

a　角力をとりたがる妖怪だが、必ずしも水に関係しているわけではない。

b　子供を水に溺れさせる妖怪だが、その対象はだれでもいいというわけではない。

c　時には人のためになる妖怪だが、その性質は優しいというわけではない。

d　深山幽谷に住むこともある妖怪だが、つねに角力をとりたがるわけではない。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

むなぐるまは古言である。これを聞けば昔の絵巻にあるやうな物見車が思ひ浮べられる。

総て古言はその行はれた時と所との色を帯びてゐる。これを其儘に取つて用ゐるときは、誰も其間に異議を挾むことは出来ない。[1]しかしさうばかりしてゐると、其詞の用ゐられる範囲が狭められる。此範囲はアルシャイスムの領分を限る線に由つて定められる。そして其詞は擬古文の中にしか用ゐられぬことになる。

これは窮屈である。[2]更に一歩を進めて考へて見ると、此窮屈は一層甚だしくなつて来る。何故であるか。今むなぐるまと云ふ詞を擬古文に用ゐるには異議が無いものとする。ところで擬古文でさへあるなら、文の内容が何であらうと、古言を用ゐて好いかと云ふに、必ずしもさうで無い。文体にふさはしくない内容もある。都の手振だとか北里十二時だとか云ふものは、読む人が文と事との間に調和を闕いでゐるのを感ぜずにはゐない。

此調和は読む人の受用を傷ける。それは時と所との色を帯びてゐる古言が濫用せられたからである。

しかし此に言ふ所は文と事との不調和である。文自体に於ては猶調和を保つことが努められてゐる。これに反して仮に古言を引き離して今体文に用ゐたらどうであらう。極端な例を言へば、これを口語体の文に用ゐたらどうであらう。

文章を愛好する人は之を見て、必ずや憤慨するであらう。口語体の文は文にあらずと云ふ人は姑く置く。これを文として視ることを容す人でも、古言を其中に用ゐたのを見たら、希世の宝が粗暴な手に由つて毀たれたのを惜んで、[3]作者を陋とせずにはゐぬであらう。

以上は保守の見解である。わたくしはこれを首肯する。そして不用意に古言を用ゐることを嫌ふ。

[4]しかしわたくしは保守の見解にのみ安住してゐる窮屈に堪へない。そこで今体文を作つてゐるうちに、ふと古言を用ゐる。[5]口語体の文に於ても亦恬としてこれを用ゐる。著意して敢て用ゐるのである。

そして自分で自分に分疏をする。それはかうである。古言は宝である。しかし什襲してこれを蔵して置くのは、宝の持ち

ぐされである。縦ひ尊重して用ゐずに置くにしても、用ゐざれば死物である。わたくしは宝を掘り出して活かしてこれを用ゐる。わたくしは古言に新なる性命を与へる。古言の帯びてゐる固有の色は、これがために滅びよう。しかしこれは新なる性命に犠牲を供するのである。わたくしはこんな分疏をして、人の誚を顧みない。

わたくしの意中に言はむと欲する一事があつた。わたくしは紙を展べて漫然空車と題した。題し畢つて何と読まうかと思つた。音読すれば耳に聴いて何事とも辨へ難い。然らばからぐるまと訓まうか。これはいかにも懐かしくない詞である。その上軽さうに感ぜられる。痩せた男が躁急、挽いて行きさうに感ぜられる。此感じはわたくしの意中の車と合致し難い。[6]そこでわたくしはむなぐるまと訓むことにした。わたくしは著意して此古言の帯びてゐる時と所との色を奪つて、新なる語としてこれを用ゐるのである。そして彼の懐かしくない、軽さうに感ぜさせるからぐるまの語を忌避するのである。

空車はわたくしの往々街上に於て見る所のものである。此車には定めて名があらう。しかしわたくしは不敏にしてこれを知らない。わたくしの説明に由つて、指す所の何の車たるを解した人が、若し其名を知つてゐたなら、幸に誨へて貰ひたい。

わたくしの意中の車は大いなる荷車である。其構造は極めて原始的で、大八車と云ふものに似てゐる。只大きさがこれに数倍してゐる。大八車は人が挽くのに此車は馬が挽く。

[7]此車だつていつも空虚でないことは、言を須たない。わたくしは白山の通で、此車が洋紙を梱載して王子から来るのに逢ふことがある。[8]しかしさう云ふ時には此車はわたくしの目にとまらない。

わたくしは此車が空車として行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない。車は既に大きい。そしてそれが空虚であるが故に、人をして一層その大きさを覚えしむる。この大きい車が大道狭しと行く。これに繋いである馬は骨格が逞しく、栄養が好い。それが車に繋がれたのを忘れたやうに、緩やかに行く。馬の口を取つてゐる男は背の直い大男である。それが肥えた馬、大きい車の霊ででもあるやうに、大股に行く。此男は[9]左顧右眄することをなさない。物に遇つて一歩を緩くすることをもなさず、一歩を急にすることをもなさない。[10]旁若無人と云ふ語は此男のために作られたかと疑はれる。

此車に逢へば、徒歩の人も避ける。騎馬の人も避ける。貴人の馬車も避ける。富豪の自動車も避ける。隊伍をなした士卒も

避ける。送葬の行列も避ける。此車の軌道を横(よこぎ)るに会へば、電車の車掌と雖も、車を駐(とど)めて、忍んでその過ぐるを待たざることを得ない。

そして此車は一の空車に過ぎぬのである。

11 わたくしは此空車の行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない。わたくしは此空車が何物をか載せて行けば好いなどとは、かけても思はない。わたくしが此空車と或物を載せた車とを比較して、優劣を論ぜようなどと思はぬことも、亦言を須たない。縦(たと)ひその或物がいかに貴き物であるにもせよ。

（森鷗外「空車」）

〈注〉 アルシャイスム…古語趣味・擬古主義（フランス語）

都の手振…山岡浚明執筆の京都地誌。

北里十二時…石川雅望作の滑稽本。

著意…気をつけること。

什襲…幾重にも包むこと。

躁急…心がいらだちせわしいさま。

梱載…束ねて載せること。

隊伍…隊列。

問一　傍線部1について、「さうばかりしてゐる」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　古言をその使用された時代の風俗や習慣から解き放って用いていること。

b　古言をその使用された時空の意味と属性に従って用いていること。

c　古言をその使用された時期の特色を強調するように用いていること。

d　古言をその使用された現場を髣髴させるように用いていること。

問二　傍線部2について、「此窮屈は一層甚だしくなつて来る」のはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　古言を擬古文の中に使用しても、その古言が古すぎて文体の中で十全に機能しないことがあるから。

b　古言を擬古文の中に使用すると、その文体が古言の持ち味を消失させてしまうから。

c　古言を擬古文の中に使用しても、その古言の示すことがらが文体と調和しないことがあるから。

d　古言を擬古文の中に使用すると、よりいっそう文と事との乖離が促進してしまうから。

問三　傍線部3「作者を陋とせずにはゐぬであらう」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　作者を大胆不敵な者と忌避せずにはいられないであろう。

b　作者をいやみで憎らしいと思わずにはいられないであろう。

c　作者を心の狭い頑固者と嘲笑せずにはいられないであろう。

d　作者を品がなく浅はかだと批判せずにはいられないであろう。

問四　傍線部4について、「古言を用ゐる」とあるが、その真意は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　古言を死滅させないで、新たな活かし方をすること。

b　保守主義者とみられることから脱すること。

c　古言の持つ固有の色を尊重すること。

d　今文体の単なる肯定者ではないと明示すること。

問五　傍線部5について、「恬（てん）としてこれを用ゐる」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　いさぎよくこれを使用する。

b　功罪を顧みずこれを使用する。

c　何のわだかまりもなくこれを使用する。

d　自由自在にこれを使用する。

問六　傍線部6について、「わたくし」が「むなぐるまと訓（よ）むことにした」のはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　言葉の意味が、耳で聴いたときにもすぐに分かるようにするため。

b　自分の述べようとする内容を、十全に表現するため。

c　古言の魅力を読者に伝えるため。

d　重厚な響きを持つ言葉に古言の特性があると考えたため。

問七　傍線部7について、「言を須たない」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　他人にも広く知れわたっている。

b　自ら思考すれば分かる。

c　他人に言われなくてもすでに知っている。

d　ことさらに言わなくても分かる。

問八　傍線部8について、「此車」が筆者の「目にとまらない」ということは、筆者のどのような心のありようを語っていると考えられるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　車に荷物が載っているのでは、自分の意中のことを表すのにふさわしくないと思っていること。

b　車に荷物が載っていることは、自分に下品な感じを抱かせるので興味が湧かないと思っていること。

c　車に荷物が載っているのでは、車そのものがはっきり見えないのでつまらないと思っていること。

d　車に荷物が載っていることは、車の利便性を示しているので自分の見方と同一だと思っていること。

問九　傍線部9「左顧右眄することをなさない」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　おべっかを使わないこと。

b　誇り高くきりっとしていること。

c　あちこちを見回してためらうようなことはしないこと。

d　機嫌よくにこやかであること。

問十　傍線部10について、「旁若無人」は、ここではどのような意味として使われているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　人の迷惑を顧みず驕った態度をとること。
b　人を気にせず自分流にふるまうこと。
c　人を軽蔑して乱暴な態度をとること。
d　人に対して無邪気にふるまうこと。

問十一　傍線部11について、次の問に答えよ。

A　「わたくし」が「空車」を「目迎へて」「送る」行為には、「空車」に対する「わたくし」のどのような気持が表れているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　敬遠する気持
b　謙虚な心情
c　畏敬の念
d　恐怖の感情

B　「わたくし」は、この「空車」にどのようなものを見ていると考えられるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　空虚に見えるものの中にこそ充実があることを悟って、生きてゆくこと。
b　俗界に存在しながらも、聖なることを目指してたゆみなく進んでゆくこと。
c　他人の黙々と働く態度を模範として、自分を律してゆくこと。
d　有用性を離れて、自分の欲するところを堂々と歩んでゆくこと。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ひとの表情やそぶり、そして言葉。言ってみれば、ひとの存在の現われや感触のようなもの、それらは「こころ」とのかかわりでどのようなものとしてあると言ったらよいのか。

わたしたちは身体のことをかんたんに英語に置き換えて「ボディ」と呼んだりするが、ボディは身体ではなく、まずは物体である。他方、[1]身体という言葉に含まれ日常わたしたちがよく使う「身」という言葉は、ボディでもなければさしあたっては「こころ」でもない。が、「こころ」でないとも言い切れない面がある。

たとえば栄養は身につくが、教養も身につく。身が軽いというのは体重が軽いという意味ではなく、動作が俊敏であるとかさらに独身であるという意味である。逆に身が重いというのも、体重が重いという意味ではなく、動作が鈍重ないしは緩慢であるという意味、さらには妊娠しているという意味である。「身を焦がす」「身を砕く」といった言葉になると、この場合は「身」を「こころ」という言葉に入れ替えても意味はほとんど変わらない。「身」はたぶん、「こころ」と「からだ」という区別に先立つような人間のとらえ方だと言えるのだろう。

「だれかが悲しんでいる」というのは、押し殺した声の抑揚(慟哭のような激しい抑揚もある)、避けるような視線、潤んだ眼、うつむき加減の変化に乏しい顔、落ちた肩、ふだんより緩慢な、次の瞬間にも動きそうにない身ぶり……、これら一定のパタンを描く[2]ふるまいや佇まいの趨勢が前後の脈絡から浮き立ってくるときに、ひとがそのように言うものなのであろう。

ヨハンソンら知覚心理学者たちのおもしろい実験がある。十数個の光点をひとの関節につけ、暗闇のなかでその光点だけを観察者に見せる。その実験結果については、心理学者の佐々木正人さんが次のように簡潔に紹介している。

A　光点が静止しているときには、点のつくる無意味なパタンが知覚されるだけである。しかし、光点が動いたとたんに、光点が人の身体に付いていること、付けている人が男性か女性か、何歳ぐらいかということがきわめて容易に知覚され

る。また、光点をつけた人が手に何かを持っている場合、それが何キログラムぐらいの荷物か、人が荷物を放り投げた場合、それが飛んだ距離なども知覚できる（もちろん荷物には光点は付いていない）。光点を付けた人が動いた場合、移動が早足か普通の速度かということ、さらにその人が移動している床が固い石かマットレスのように柔かいものか、などということまでも知覚される。

（『アフォーダンス――新しい認知の理論』）

「見る」というのは、このように見えるもののなかから[3]「不変項をピックアップする」ことだと考えられるとすれば、この不変項は「わずかな配列の変更だけでも」感知される。じっさい画家がひとの姿を一筆描きするときにはそのようなとらえ方をしている。

それら一連のパタンを「振り」の連続として再構成し、様式化したものが文楽であり、歌舞伎であると言える。それこそ「振り」と「舞い」の集合から「こころ」をそこに現前させる技である。歌のような口舌（こうぜつ）と、しなるようなふるまいとによってわたしたちの「情」にあたえられた、見え、聞こえるかたち。文楽の人形や歌舞伎役者の身体は、「こころ」というものがけっして見えない内奥（ないおう）のものではなく、指先、足先にまでゆきわたった見えるものであることを教えている。時間と（身体という）空間のなかに溶け出たひとの「情」。それは胸苦しいばかりに濃い。その濃さは、人形が女を演じていること、あるいは老人が娘を演じていることを忘れさせる。男女の、声としぐさに現われる、それ本来は作り物でしかない[4]〈しるし〉が「ひと」をかたちづくるものであることを、まざまざと伝える。

わたしたちの日常の「ふるまい」も、この「振り」と「舞い」の組み合わせにほかならないのではないか。「ふるまい」を様式化したのが「振り」と「舞い」なのではなくて、逆に、[5]あたえられた「振り」と「舞い」をまねぶなかで、ひとはひとびとのあいだに充満する〈しるし〉をおのれのうちにも浸透させ、そして[6]「情」を他者たちと分かちあうべくおのれのうちに住みつかせてゆくのではないか。

ここで、子どもの顔をじっと見つめながら、喜怒哀楽を大げさな表情で返している若い母親の姿を思い出してもいい。いま

自分が浸っているこの感情がどういうものか理解できない子どもに、母親はそれがどのような感情であるかをその大げさな表情で、あるいは身ぶりで、鏡のように映してやっている。そのことで彼女は子どもに感情の分節[7]、つまりそのかたどりを教えているのだ。ここで共有されることになる見える〈しるし〉、それがひとのこころの原型となる。

（鷲田清一『わかりやすいはわかりにくい？』）

問一　傍線部1〈身体という言葉に含まれ日常わたしたちがよく使う「身」という言葉は、ボディでもなければさしあたっては「こころ」でもない。が、「こころ」でないとも言い切れない面がある〉は、「身」と「ボディ」の差をどのようなものとして捉えているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「身」は洗練された振舞い感覚によって維持され、その人の人柄を滲ませるものとして捉えられるが、「ボディ」は物体としての身体に留まる。

b　「身」は「こころ」の影響下にあり、必ず「こころ」と一体化して把握されるが、ボディは「こころ」の対極にあるものとして把握される。

c　「身」は心身未分離の状況を踏まえ、その相関的な感覚として把握されるのに対し、「ボディ」は物理的な身体として、心から切り離されたものとして自覚される。

d　「こころ」は「身」に従属し、「身」のありように振り回され、それに規制されるように現れるが、「ボディ」として捉えられる身体がそのような越境をすることはない。

問二　傍線部2〈ふるまいや佇まいの趨勢〉とはどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　時代の行動規範の行方

b　行動類型の推移

c　あるべき姿勢の矯正

d　立ち方、振舞い方の勢いと方向性

問三　引用文Aで述べられた光点の知覚を例として、筆者はどのようなことを述べようとしているか。筆者の考えにもっとも近いものを次の中から一つ選べ。

a　光点の移動は最初無意味なパタンとして認識されるが、次第に光点を身につける人物の行動・性格・心まであらわにするようになる。

b　光点の移動は実際の動きを目にする以上に、動作というもののパタン化された認識のありようを浮かび上がらせる効果があった。

c　光点の移動は身に付けた人物の動作の距離、速度、環境などを示唆するデータを提供する有益なものであった。

d　光点の移動は、人物の性別や年齢によって大きな変化を見せ、行動の性差、年齢差を視覚的に自覚させる。

問四　傍線部3〈不変項をピックアップする〉とはどのようなことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　何が不変かを峻別し、不変を押さえていくことによって、逆に不変でないものの「動き」を認識できるようになること。

b　変化するものの中から、不変のものを探り出し、それを最重要のものとして特に記憶に留めること。

c　どれが不変でどれが不変でないかを項目ごとにチェックし、項目の優先順位を決定すること。

d　不変と変動の関係を明確化し、なぜ不変の項目が出てくるかの原因を究明していくこと。

問五　傍線部4〈しるし〉が〈「ひと」をかたちづくる〉とはどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「ひと」が感情を表す〈しるし〉を外に表明するのではなく、外化された〈しるし〉によって、逆に「ひと」であることが納得されるという順番なのだということ。

b　外側に現れた標識によってひとと認識することができるので、ひとがひとらしくあるためには独特のしぐさの洗練が必要だということ。

c　〈しるし〉は声としぐさに現れており、必ずしも、外見を必要とせず、人形であってもさしつかえがないということ。

d　その人物がどのような人物であるかということは外側の動作や振舞いに刻印されており、その外側によって本人自身のありようも規定されるということ。

問六　傍線部5〈「振り」と「舞い」をまねぶ〉とあるが、これはどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「舞い」の手振りをまねすることで、ひとは洗練された優雅な身ぶりを獲得できる。

b　他者の動作をまねしながら学ぶいとなみの中に、ひとはひととしての感情とその表現を獲得する。

c　ふるまいは「振り」と「舞い」の様式化された所作の反復学習によって獲得され、身についたものとなっていく。

d　他者の身ぶりをまねすることで、わたしたちの動作は次第に無駄をそぎ落とし、意図した動作をスムーズに行えるようになる。

問七　傍線部6〈「情」を他者たちと分かちあうべくおのれのうちに住みつかせてゆく〉とはどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　他者と自己を結びつける共通の要素を他者のうちに確認し、それを誇張、再生産することで、感情を表現しようとすること。

b　情を交わしあう関係として、常に他者にまなざしを注ぎ、その思いを忖度（そんたく）することで、自己の対応を調節すること。

c　他者と共感するための、感情に結びついたしぐさのパタン認識を自己の内側に蓄え、それを活用、応用することで他者と交流をはかっていくこと。

d　他者と共感的に対話するためにはまず、自己に沈潜し、みずからのありようを見つめてから、他者に向き合うべきであるということ。

問八　傍線部7〈感情の分節、つまりそのかたどりを教えているのだ〉とはどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　感情の調節のしかた、反応のしかたを、みずから演じてやることで子どもに理解させようとする。

b　他者の感情をその表情から読み取る訓練をさせ、その感情に合わせて行動することを教える。

c　子どもには理解できない細かい感情の襞々を、母は実演することで、子どもに教え込もうとしている。

d　曖昧な感情というものは、どのように区別して、明確な感情として表出できるのか。どのように表現したら、相手に伝わるかを教えている。